

知的障害特別支援学校における「社会性の学習」で付けたい力の系統性

小学部・中学部・高等部教員が捉える「社会性」の違いに着目して

○土屋美奈

(東京学芸大学大学院教育学研究科・東京都立品川特別支援学校)

奥住秀之

(東京学芸大学)

KEY WORDS: 社会性の学習、知的障害特別支援学校、自閉症教育、系統性

目的

平成22年、東京都教育委員会は、小・中学部を設置する知的障害特別支援学校全校において「自閉症学級」を設置し、その教育課程の中心として「社会性の学習」(各教科等を合わせた指導)を創設した。指導内容の中心は、対人関係とソーシャルスキルに関する指導である。自閉症の障害特性である社会性の課題に関わる学習上、生活上の困難さを軽減し、社会参加の幅を広げることを目的としている。

しかし梅永(2012)は、「成人となった自閉症者にとって、必ずしも必要とされないスキルの獲得が教育目標とされている」と指摘する。また東京都教育委員会(2017)は「知的障害特別支援学校における一貫性のある自閉症教育充実事業」の中で、「各学部・学年で、より児童・生徒一人一人の実態に応じた教育を実施するためには、標準化された発達検査に基づく指導・支援を、小学部から高等部卒業まで一貫性をもって実施していくことが大切である」と提言している。

本研究では、知的障害特別支援学校の小・中・高等部の教員を対象に、「社会性の学習」や高等部の自閉症教育についての調査を行い、各学部における回答の比較検討を行う。「社会性」をキーワードに、小学部・中学部・高等部の各段階において捉えられている「社会性」とは何かを分析・整理することを目的とした。

方法

1. 調査対象：知的障害特別支援学校の教員(小・中・高) 33校、163名より回収でき、回収率は73%であった。
2. 調査時期：2016年12月～2017年2月
3. 調査内容と手続き：4件法と自由記述からなる質問紙法
4. 得点化：4件法について
4点「非常に、とても～ある」/3点「やや、少し～ある」
2点「あまり～ない」/1点「ほとんど～ない」とした。
5. 分析：各学部で捉えられている「社会性」の差異を明らかにするため、各学部における『社会性の学習』で付けたい力を「日本版 Vineland-II 適応行動尺度(以下、Vineland-II)を用いて分析した。Vineland-IIを用いた理由として、東京都教育委員会(2017)が推奨している発達検査である、対象年齢が0～92歳であり、小・中・高等部、そして卒業後の社会を見据えた評価ができる、知的障害、ASD児・者の臨床データを持っていることが挙げられる。

結果

表1は、「社会性の学習」で付けたい力について、小・中学部教諭と高等部教諭の比較である。縦軸は評定平均値、横軸は Vineland-II の下位領域である。小・中学部では「対人関係」が最も高く、極めて高い数値だったが、2点台(あまり必要ない)が4項目もあり、各項目の数値に差が出た。高等部では小・中学部より各項目の差は少なく、全ての項目において3点台(必要である)であった。小・中学部と高等部で最も差があったのは「身辺自立」である。

表1. 「社会性の学習」で付けたい力 小・中学部と高等部の比較

	1.受容言語	2.表出言語	3.読み書き	4.身辺自立	5.家事	6.地域生活	7.対人関係	8.遊びと余暇	9.コピングスキル	10.粗大運動	11.精緻運動
平均値	3.79	3.66	2.66	3.01	2.89	3.01	3.90	3.70	3.43	2.88	2.76
高教員	3.88	3.70	3.12	3.79	3.33	3.18	3.73	3.45	3.55	3.21	3.15

「4」とても必要である。「3」必要である。「2」あまり必要ない、「1」必要ない

高等部の方が小・中学部より0.78高かった。小・中学部、高等部共に最も低かったのは「読み書き」であるが、小・中学部は2.66、高等部では3.12であった。

考察

「社会性の学習」指導書によると、『社会性の学習』の『社会性』とは一般的に言われる社会生活全般に関わる広い意味ではなく、自閉症の障害特性により、社会で生活していく上での困難さと関係している」と述べている。よって小・中学部において「社会性」は、自閉症の障害特性に特化した狭義の意味に捉えられており、対人相互反応の困難さに関わる「対人関係」が極めて高くなったものと考えられる。そして、「読み書き」「身辺自立」も高等部に比べて低かったのは、「身辺自立」は日常生活の指導、「読み書き」は国語・算数/数学の授業を中心に行っているため、「社会性の学習」とは関連が薄いと捉えられているためと考えられる。一方、高等部における「社会性」は前述した、「一般的に言われる社会生活全般に関わる広い意味」と関係していると思われる。表2は「社会性の学習」の学習内容表、表3は、高等部のキャリア教育発達段階表をそれぞれ Vineland-II の視点から分類整理した表である。比較すると、表3には表2にはない「身辺自立」がある。高等部の「身辺自立」が高かったのはこのためだと考えられる。表3では更に「表出言語」「家事」が加わり、表2より3項目多くなる。2006年に厚労省が出した「就労移行支援のためのチェックリスト」を Vineland-II で分類すると、表3から更に「読み書き」「微細運動」が加わる。以上、高等部では就労等、社会参加・自立に向けて、幅広い項目が「社会性」と捉えられており、小・中学部の「社会性の学習」で捉えられている「社会性」とは違いがあることが示唆された。

表2. Vineland-IIにおける「社会性の学習」学習内容表の分類

	学習内容例	Vineland-IIでの分類
対人関係に関する事	①身近な人の存在の理解 ・他の人の存在を理解する ・人とやり取りをして行動する	対人関係
	②他の人や状況の理解と行動 ・他人からの期待に応じた行動 ・場面に応じた行動	受容言語 コピングスキル
	③周りの人に合わせた行動 ・人と行動を共有できる ・役割の理解と行動	対人関係
ソーシャルスキルに関する事	・役割活動	対人関係
	・挨拶	対人関係
	・ご用学習	受容言語
	・称賛の理解	受容言語
	・マネー	コピングスキル
地域生活	・スケジュール	コピングスキル
	・活動の切り替え	コピングスキル
	・因果関係の理解	コピングスキル
	・移動・交通ルール	コピングスキル
	・公共施設・交通機関の利用	地域生活
	・買物	地域生活
	・身近な道具・用具の使用	地域生活
・順番の理解	遊びと余暇	
・体癖の取り方	遊びと余暇	

表3. Vineland-IIにおけるキャリア教育発達段階表(高)の分類

領域	具体的な指導	Vineland-IIでの分類
人間関係形成能力	身辺処理、服装、身だしなみ	身辺自立
	言葉遣い	コピングスキル
情報活用能力	集団の一員としての役割遂行に関する指導	対人関係
	自己紹介、長所と短所	表出言語
将来設計能力	公共施設、交通機関利用のルールとマナー	地域生活
	パソコンの利用	地域生活
	電話の使い方	受容言語
	法制度の理解	受容言語
意思決定能力	健康管理	身辺自立
	一人通学	地域生活
	買物	地域生活
意思決定能力	調理、洗濯、美化活動	家事
	将来の設計	表出言語
	余暇利用	遊びと余暇
意思決定能力	目標の設定と振り返り	表出言語

文献

- 梅永雄二(2012)自閉症スペクトラム者の就労支援.自閉症スペクトラム研究,9,1-7
 東京都教育委員会(2017)知的障害特別支援学校における一貫性のある自閉症教育充実事業.東京都特別支援教育推進計画第三次実施計画に基づく報告書,35-52
 黒田美保・伊藤大幸・萩原拓・染木史緒(2014)日本版 Vineland-II 適応行動尺度.日本文化科学社,12-22
 東京都教育委員会(2011)東京都立知的障害特別支援学校小学部自閉症学級指導書 社会性の学習,9-10
 東京都教育委員会(2009)知的障害特別支援学校におけるキャリア教育の推進,5-7
 厚生労働省(2006)就労移行支援のためのチェックリスト,3

(TSUCHIYA Mina, OKUZUMI Hideyuki)